

「やってみよう！科学する心×いのち真ん中社会の保育実践」 報告レポート

社会福祉法人カメラアあじさい保育園

塚田洋子

はじめに

全くの偶然が重なった、ソニー教育財団や保育実践論文、ぐうたら村やごりさん、豆先生、ゼミの仲間たちとの出会い。何気なく、何となく、毎日をただひたすらに重ねてきた自分が、「子どもって？人間って？地球って？命って？」と頭を抱えながら考えた半年間。今も尚答えは無く、迷い、悩み、考え続けている。でも一つこれだけははっきり言える、「やってみて良かった」ということ。やらなければ、問いは生まれず、悩みもしなかった。この問いは自分にとって良い問いであり、一生かけて考えていけるテーマなのだということ。この機会が無ければ、人生自体が全く違ったものになっていた。だから、悩んでも、苦しくても、これだけは言いたい。「ありがとう、問いをくれて！みんなで考えてみるよ」



興味津々で訪れた「ぐうたら村」この時の自分にははっきり言って「ワクワク」した感情しかなく、この後大きな問いにぶつかるとは思ってもいなかった…。



はじめてのぐうたら村、はじめて直接会う仲間たちそして講師のごりさん。出会って早々にごりさんに投げかけられた質問は衝撃過ぎて今も良く覚えている「初めて地球にやってきた人に、この星の事を説明してみて」そのワークがなぜ衝撃を受けたかという、実は自分は何となく地球に住んでいる人間だったから。その事実を知って愕然としたから。

「私たち、この星に勝手に住んでいるよね?!」

「勝手に暮らし始めて、あれが足りない、これが足りない、それは俺の、私の、便利だから変えよう、殺そうって言うよね?!」

全部人間中心で回っている？私も含めて！

ショックを受けている私にごりさんは優しく言う。「今までが悪いって言っているんじゃない、でもこの事に気が付いたこと、これからその事を知って生きていく事、みんなに知ってもらえるようにしていく事ができると、もっと良い未来が待っているんじゃないかな」

そして、自分たち教育者がその担い手として大きな役割があるのだという。そんな！

そのための手ほどきの一つとして、ぐうたら村の森や畑、人間以外の動物、虫、植物、水や土、ありとあらゆる「命」がそこかしこに存在している事を見せてくれた。

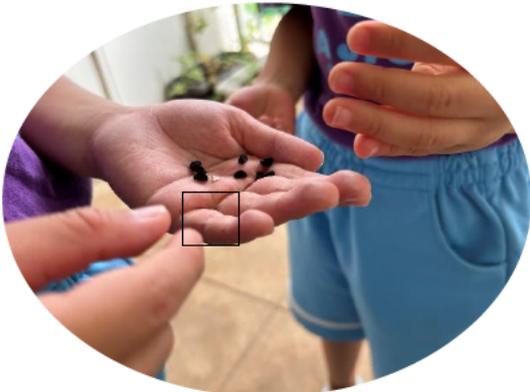
当たり前にかかっていた命の存在に驚き、そして「自分だけいい思いをしている！」事が悲しくて涙が出てきた。自分の愛する人たちにも体験させてあげたい！

それは、我が子やクラスの子どもたち。



「自分だけが、良い思い…」ってどんな思い？
 あの時沸き上がった感情は複雑すぎて今も良く分からない。ただ、「知らなかった命が溢れている事を知ってびっくりした」のか、「モグラの穴を発見して感動した」のか「子どもたちが大好きなキノコを見せなくなった」のか…。この場所に子どもたちみんなと来る事ができたらどんなにいいか…。みんなと来る事が出来なくても、私が味わった体験と同じ体験が出来るようにすればいいの？でもどうやって？自分に出来る？ごりさんが教えてくれたら良いのに！など、ここでもまた複雑で混沌とした感情が渦巻いていた。

「命の巡りを感じる実践を一つでもやってみる」という自分に課せられた宿題。この前代未聞のテーマを持ち帰ることになり、ワクワクと不安が入り混じった日々を送る事になるとは思ってもいなかった。これまで自分がやってきた事は「命を大切に」「自然を大切に」だけ。なんで大事なの？なんで大切にするのか？まで正直にいて考えていなかった。頭を抱えながらも、「考えていなかった事に気が付けたのは良かった！」「考えられるように伝えていく使命がある！」なんて前向きに捉えて気持ちを奮い立たせたりもした。中間報告時点で何か一つでも「やってみました」が報告出来るようにしようと、あれもこれもいろいろ手を出してみた。



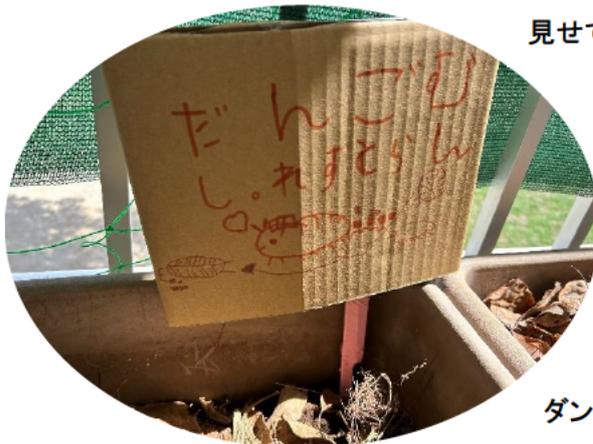
種を沢山採っておいたり



ぐうたら村について掲示して
見せてみたり



ブロック岩を置いてどうなるか見てみたり



ダンゴムシレストラン
作ってみたり

いろいろやって、「面白い！」とみんなで感じる気づきがあったり、「不思議だね？どうしてなんだろうね？」と考える場面も沢山増えた。でも「命の巡りを感じる」体験はできている？…。この時の自分は早急に「巡りを感じたい！感じさせたい！」思いがいっぱいで「どうしたら感じられるだろう？」と悩んでいた。何が足りない？何が必要？言葉で伝えるスキルがない？言葉で伝えて感じられるものではない？実践が間違っている？やり方を変える？思考がぐるぐる行ったり来たり。今思い返せば、「早く成果が欲しかった」「答えを見つけたかった」のだと思う。

そうじゃない、それこそが学びだとまだ知らずに、「こんなことやりました、そしてこんな良い事になりました」が欲しかったのだ。



成果主義の社会にどっぷりつかって大人になり、一人焦っている私をよそに、子どもたちは正直に真っすぐな気付きを重ねて毎日過ごしている。そんな子どもたちを見て自分が気付かされる。「もっとこの子たちの今を信じていいのかも」「私が気付いて、今こうしていろいろやっている姿こそが、意味のある事なのかも」「あ～そういえば先生あんなことやっていたな、あれ？僕たちもやったよね」なんて感覚でもいいのかも。そんな風にも考えられる瞬間も生まれてきた。でも、まだ「これだ」という成果を期待していた。

中間報告では、秋が深まった美しいぐうたら村に来村。それぞれの近況報告も行う。仲間たちみんなも同じように悩み、模索しながら実践をしていた。そこで感じたのもやはり「焦り」。みんな同じように「目に見える答え」が欲しいのだと感じる。それをきちんと察知してごりさんは一言「もっと長い目で見ていく必要があるよ」



ぐうたら村コンポストの中のぷりぷりの幼虫
こんな幼虫が生まれるコンポストが欲しい

少し、時間が必要な実践をやってみようと、中間報告時に「屋上の緑化」や「テラスの緑化、コンポスト作り」など掲げてみる。すぐには無理でも、ちょっとでも取り組んでみる事で何か変わるかもしれない。今、自分の意識が変わっているように。すぐに成果は出ないかもしれない、失敗するかもしれない、どうなるか分からない…。全くの手探りで「やってみたくて」と園長に伝える。理解はしてやらせてくれたけど、「いったい何をどうしたいの？」と問われると、自分でもしっかり答えられないような気がする。何故なら自分だって良く分かってないから。「命の存在、巡りを感じて感動する事が良い未来に繋がる」気がするから？そんな理由で実践初めてみて大丈夫なの？でも、動かない事には失敗も何も始まらなかった。



コンポストは、園に2つ、自宅にも一つ用意してみた。園のコンポストに入れるのは給食調理時に出る野菜くず。毎日給食室から提供してもらい、子どもたちが刻んでコンポストに入れるようにした。「先生、これ一体どうするの?」「これやってどうなるの?」子どもたちの素直な問い。それに対する私の答えも「たぶん、土になると思うの」と自信なさ気。だって、自分も初めてやってみるから。ぐうたら村みたいになかふかの土になるか分からない。虫が沢山湧いたらどうしよう、鳥が荒らしに来たらどうしよう、と不安ばかりだった。だが、それでも続けていると「先生! 今日すっごくあったかい!」と気が付く日がやってきた。本当だ! あったかい! すごい! 子どもと一緒に感動して嬉しくなる。こうなると、「なんで、土があったかくなるの?」「微生物が食べてるんだって」「微生物って何? 捕まえない!」「米ぬかって何?」などどんどん問いが生まれてくる。毎日繰り返していくうちに「あったかくない日」に気が付いたり、「土ってウンチって事なんだね」と自分なりに考えて答えを出そうとする子が現れたりする。一見、土作りを体験しているだけのように感じるが、本質はそこではなく、「こんなところにも、自分たち以外の小さい命ってあるんだね」という事に気が付く経験になっている。そして、その事について私が多くを語る必要がないくらい子どもたち自身で学び取っている事が分かる。

ゼミでの学びについては当初から保護者にも発信していたので、コンポストの実践から「落ち葉堆肥場作り」の参加者呼びかけに繋がった。子どもたちから聞いていた事もあって、クラス約半数の保護者が参加してくれた。気持ちよく協力して下さる中、「この落ち葉って、いつ堆肥になるんですか?」という質問が沢山出てくる。「2年は掛かるらしいです」と告げると「2年も!」とびっくり。「プラスチックは400年掛かるらしいです」「え~!!」と、もっとびっくり。だから、何なんだ、と言われたら何でも無い事なんだけど、そういう事って考えた事無かったな、そうなんだって、知っているのと、知らないのでは全く生き方が変わったりしませんか?なんて話が盛り上がった。一生懸命作った堆肥場。でも、この落ち葉が堆肥になって野菜苗の土になるのは2年も先。でも2年後に本当に土になって使える事になれば「ひとつ次に繋がった」事になるのかな?「土が必要なら、買えばいい」の生活から少しだけ変化が訪れたって事になるのかなと思ったりする。



コンポスト、落ち葉堆肥場の土(熟成中、未完成)は卒園記念品として園に贈り、次に繋げてもらう事に。

「繋げるって、どういうこと？」クラスから出た問いを、子どもたちと考えながら、次のクラスの子たちに話して聞かせ、少しでも分かってもらえるようにした。

まとめ

まとめ、と記してみたが、実際は何もまとまっていない。何故ってこれからが本番だから。今回は、出会いがあって、知って、試して取り組んでみただけ。この取り組みが実になっていくには何年も掛かるはず。土のように。大きな使命を託されたようで、はじめは「よし！やるぞ！」と、意気込んでいたけれど、今はまた悩みや葛藤の真っ只中にいる。

その悩みとは、「同じ思いを共有できる人を増やす難しさ」である。家庭や職場でどれだけ熱弁したり、発信してみても実際身をもって「命を感じる感動」を味わったり、「意識を変えようとする気持ち」がないと、思いの共有はできないという壁にぶつかっている。「あの人は土が作りたいらしいよ」と、勘違いされておりどうしたものかと頭を抱える。確かに土はいじっているけど、別に土が必要で作っている訳じゃない。この壁が、なかなか高く厚そうで、情けない私は一瞬怯みそうな気持ちになる。でも、そこでも勇気をくれたのがゼミの仲間の励ましの言葉、ソニー財団の支え、そしてごりさんが教えてくれた言葉。「…一定レベルの混乱を必然的に伴います。それには様々な程度の勇気、粘り強さ、決意が必要です。…」(ESD for 2030 より) 始まったばかりなのに、何をくじけそうになっているんだ！勇気と根気はある方じゃないか！と、この言葉を何回も読んで、聞いて、自分を励ましている。

忘れちゃいけないのが、自分のクラスの子どもたち。よく分かっていない担任のもとで、よっぽど命を感じ、「こういう事なんだね」と気付くアンテナが高い。命を感じさせたい！と躍起になっている私にとっては、この子どもたちの「命」の輝きにも圧倒される毎日であった。なんて純真で真っすぐなんだろう。なんて素直に捉えて吸収するんだろう。だからこそ私たちの役割って大きい。でも私たちも全く完璧じゃなくて、いつもいつも迷って悩んで苦しんでいる。一緒に成長させてもらっている。教育という仕事の面白さ、やりがいを改めて感じさせてもらっている。今、願っているのは、この未熟な担任との一時期の取り組みが「面白かったね」だけで無く、何となくでいいから心に残って「そういえば…この土って…」と考えたり「落ち葉って…」と思い出したりしてくれる事。「確か、保育園の時コンポストやっていて、野菜くず土に返していたんだよね、土がすごく温かくなってね…」「それに落ち葉の堆肥場作ったよね？」と思い出す時、「なんで、あんなことしていたんだろう？」と考えてくれたら嬉しい。だって、もうそれだけでも体験しているのと、していないのでは全く違うはず。そこに「意味」を見つけてくれるかもしれない。だからきっと、私は小さい「種」を蒔いたのかもしれない。私は野菜くずが入った土かもしれない。でも未完成の土。みんなの種が芽を出して、大きく成長できるように、しっかり栄養を摂って熟成して良い土にならないと！

温かい時もあれば、上手いかわなくて冷たかったり、失敗して虫が湧いちゃう事もあるかもしれない。でも、捨てないでお日様にあててやり直せばいい。どんな事してもずっと冷たいままだったら、またソニーやゼミの仲間に温めてもらおう！ごりさんの言葉を、豆先生の励ましを思い出そう！そんな風に自分自身の気持ちを奮い立たせる。

去年の自分が知らなかった事を今の自分は知っていて、知っているだけだけど、それだけでも成長って思える。教育者も成長には時間が必要だと今は分かる。自分も含めてすべての教育者に伝えたい。焦らないで。すぐに成果を求めないで。ゆっくり、温かく見守って。やめないで根気よく続けてみて。失敗しても、大丈夫。取り組んでみた事に意味があるよ。と。